

文部科学省委託事業
帰国教師ネットワーク構築事業

2018年度
「教育実践研究」
支援プロジェクト
報告書



2019年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団

申請日: 2019年 3月 19 日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
グローバル教師事務局 宛

2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクト 報告書

1. 研究代表者	
(1) 氏名(ふりがな)・役職・所属校での年次	中田佳珠美(なかつたかずみ)3年目
(2) 所属校	クアラルンプール 日本人学校
(3) e-mail アドレス	
2. 共同研究者氏名(役職・派遣教師か否か・所属校での年次も併記してください)	
3. 研究課題名	
EC 改革に向けて	
4. 申請時の状況と課題	
本校における英語の授業(EC)に対する児童、生徒や保護者からの不満が後を絶たない。英語が楽しいと感じないといった意見が目立つ。マレーシア人の先生方の考え方が日本人の教員の考え方と不一致している。EC とはイングリッシュ・コミュニケーションを指しているが、実際行われているのは英語の授業であり、ライティングとリーディングに時間を割いている。日本人の教員が求める EC のクラス像は、スピーキングに特化し、自己表現したり、ディスカッションができるようになることである。	
5. (支援を受ける)目的・ねらい	
直ぐに改善できることから積極的に取り組み改善を図りたいと考える。 特に、今回は昨年度からEC教育の充実を図ることを学校目標の一つとして掲げており、今年4月に、今までとは違うティーチングスタイルを押し出していき、徐々に改善を図りたいと考えている。	
6. 取組内容(※指導を受けた内容も記載のこと)	
EC の先生方、現 EC コーディネーターと私で、現在行われている EC の授業に関して意見交換を行った。その際に、どういった所に改善が必要か、保護者から届いている声にはどのようなものがあるのかを話し合った。その後、今回、アドバイザーとして東京学芸大附属小学校で御活躍されている石毛先生をマレーシアにお招きし、まずはECのクラス見学を行って頂いた。その後、どうであったかの話し合いを行った。その後、実際に二年生の一クラスで石毛先生による外国語活動の授業を行って頂いた。日本人の先生方で、お時間のある方々には実際に授業見学を行って頂き、EC の先生方にはその授業を撮り、後に行われたミーティングで映像を使用しながら、日本の英語教育の在り方をお伝えした。 日本人の先生方の EC に対する理解を深めて頂く為に、石毛先生によるワークショップを行って頂いた。間違ってもいいんだよという空間を創るのが大切だということを教わった。また、外国語活動に関しては、担任の先生方が積極的に関わっていくことの重要性も教えて頂いた。	
7. 成果・効果等(※詳細に記載し、成果物があれば添付のこと)	

EC の先生方の大幅な意識改善が行われた。積極的に、こちら側が提示したオンライン講座を受講したり、石毛先生とコンタクトをもっと取り、色々なことを質問したいという声上がるようになった。また、今まで考えていた、ライティングとリーディングが一番重要だという考えにおいては、少し変化があり、授業の大半をその二つの技能向上に割くのではなく、ライティングであれば授業で習った単語を宿題のワークブックで補ったり、スペルチェックテストを行っていたのを、記号で選ぶ選択問題に変えた方が良いのではないかという考えに変化しつつあるのが先生方のミーティングから伺える。また、リーディングでは、司書の先生がやさしいレベルの本を購入して下さるお話をもって来て下さったりといった、以前より幅広いところからのサポートが見受けられるようになった。

日本人の先生方の外国語教育に対する意識に少し変化があったのが伺える。今までは、マレーシア人の先生に丸投げ状態であったところから、少しずつではあるが興味関心をもち、一緒に考えるスタイルになってきたのではないかと考える。

8. 今後の展開・取り組むべき課題

具体的に EC の授業の改革を行うのは4月からになる。EC 教育において、大きな目標掲げる。目標は、「We Love English!」子ども達自身が、英語を話したり、使ったりするのが楽しいと思える授業展開が必要である。EC の先生方にたくさん子ども達と話してもらうことが課題である。間違ってもいいといった姿勢で授業改善に向けて取り組みを行って頂けるよう、常に EC の授業の見学をし、フィードバックを行っていく。そして、一緒に考えて、どうしたら子ども達が「英語が楽しい！」と思えるようになるのかを考えていく。

7. まとめ

今回、直接子ども達に教えるという授業ではないことに対する改善を図った。マレーシア人の先生と日本人の先生が考える英語教育の在り方の違いを把握し、子ども達がどうしたら効果的な英語の授業を受けることができるのかを考える最初のきっかけになった。意識改革の第一歩として、粕谷先生と石毛先生には大変お世話になった。4月からのスタートで、まずは日本人の先生、マレーシア人の先生、そして保護者の皆様に英語教育に対する共通理解を図り、一緒に英語教育改善に向けて進んでいきたい次第である。

※記入欄は適宜拡張してください。

申請日:2018年11月30日

公益財団法人 海外子女教育振興財団

グローバル教師事務局 宛

2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクト 報告書

1. 研究代表者	
(1)氏名(ふりがな)・役職・所属校での年次	夏 莉 匠 (なつが り た く み) ・ 教諭 ・ 4年次
(2)所属校	サンチャゴ <u>日本人学校</u> ・ 補習授業校
(3)e-mail アドレス	
2. 共同研究者氏名(役職・派遣教師か否か・所属校での年次も併記してください)	
3. 研究課題名	
地域に飛び出していく日本人学校	
4. 申請時の状況と課題	
○申請時の状況 派遣4年目を迎え、本校が位置する区の文化・芸術部門担当者とコンタクトをとることができ、日本人学校を地域にある全29の学校(公立校6校、財団設立校12校、私立校11校)の中の 1 つとして認識してもらうことができた。このつながりをもとに、同担当者が区の取り組みとして企画した「第1回ロバルネチエア芸術祭～ロバルネチエア区学校間文化交流イベント～」に参加することができた。 ※第1回ロバルネチエア芸術祭の主な内容(資料①写真「芸術祭の様子」参照) 参加対象:ロバルネチエア区内の学校(公立校・財団設立校・私立校)小学生～高校生まで 内 容:各校によるステージ発表(文化交流が目的)、各校作品展示ブース発表(芸術交流が目的) イベント参加を通して子どもたちに国際性を培う機会が得られたことはもちろん、教師としての言語活用スキル向上や現地理解教育の推進力向上にも大きな手ごたえを感じた。また、当日の日本文化発表や他校の発表及び芸術作品鑑賞を通して、日本文化を世界に発信するための指導技術を磨いたり、日本的な教育技術にはない考え方を学んだりすることができたことも大きな成果であった。 ○課題 以上のような経緯、問題意識を踏まえ、グローバル人材育成・教師のグローバル化を目指した「地域に飛び出していく日本人学校」の在り方を研究テーマとして設定し、実践の成果と課題について考察する。	
5. (支援を受ける)目的・ねらい	
今回の芸術祭参加について、成果と今後の課題や可能性を明らかにする。 芸術祭参加を通して得られた成果を芸術祭参加の本校における目的と照らし合わせて検証し、サンチャゴ日本人学校として取り組んでいく国際理解教育の可能性を探りながら今後の課題を明らかにしていく。 子どもたちが、 ・日本文化ステージ発表や作品展示に向けて準備を進める様子、 ・当日集まった現地の人々を前に「日本の良さを伝えよう」と堂々発表する様子、 ・イベントを通して一番の盛り上がりと拍手を受けて誇らしげにしている様子、 を見て、日本文化発信拠点としての日本人学校の存在意義を実感し、また子どもたちに国際性を培う上でこれまでに続けてきた現地校交流で得られた成果以上のものを感じた。自分の中に「確かな手応え」としてあるこれらの成果を、専門的見地をもつ先生方からのご指導をもとに、きちんとした形でまとめたいというの	

が大きな目的である。

6. 取組内容(※指導を受けた内容も記載のこと)

2015～2017…インターナショナルスクールとの現地校交流(毎年2回程度)

2018…インターナショナルスクールとの現地校交流(継続交流校、新規交流校含め2回程度)

第1回ロバルネチエ芸術祭参加

(図工・美術作品出展、和太鼓演奏、民舞ソーラン節発表、日本人学校音頭発表、チリ国歌斉唱)

ウニベルシダ・デ・サンティアゴ・デ・チレ(地元大学)日本語学科学生主催による日本祭り参加

(4～6年生によるソーラン節発表、学生企画の模擬店巡り・学生との日本語交流)

音楽の日イベント参加(和太鼓演奏)

2019 2月18～19日…東京学芸大学 小山英恵先生による本研究支援・指導および授業視察、講義

ロバルネチエ芸術祭担当者(区役所職員)へのインタビュー取材

(指導内容)

- ・本研究における成果および課題について(報告書の作成に向けた具体的な指導)
- ・本校の教育環境と関連させた本研究への具体的提言(カリキュラムマネジメントの視点)
- ・本校全職員への講義

(グローバル教育に求められる能力、グローバル社会において求められる資質や能力の育成、日本人学校の今後の可能性)

7. 成果・効果等(※詳細に記載し、成果物があれば添付のこと)

本研究の柱は、日本人学校が地域コミュニティの一部になるという点にある。サンチャゴ日本人学校のあるロバルネチエ区は、サンチャゴ市内の中でも、様々な多国籍・多文化的な背景をもつ学校が多く、そこに通う子どもたちもまた同様である。また、区内には富裕層が暮らす地域と貧困層が暮らす地域があり、そこに住む子どもたちや学校も地域ごとに様相は大きく異なる。ロバルネチエ芸術祭実施の大きな目的は、このような地区の文化的差異と経済的差異という2つの差異を、芸術分野における交流を通して1つにしようとするのであった(芸術祭担当者インタビューより)。

このような地域に根ざした芸術祭への参加は、学校間の打ち合わせでイベント的に行ってきたこれまでの現地校交流とは違い、①本物のグローバル環境に身を置くことによる国際理解教育に関する成果が児童生徒および教師の指導力に関してみられただけでなく、②区全体の学校に対して日本文化を発表することにより、イベント後に区の別イベントへの出演依頼が入ったり、他校の美術科教員が日本人学校の授業の様子を見学しに來たり、他校のミュージカル発表に教員が招待されたりするなど、これまでにない活発な学校間交流実践へと発展し、地域の需要に基づく日本人学校の活動の展開という成果がみられた。

以下、①については、日本人学校が芸術祭へ参加する目的(子どもたちに付けたい力)として設定した、「自他の文化に対する理解」「異なる文化をもった人々と共に生きていく態度」「国際社会に生きる日本人としての自覚」という3つの目的ごとに具体的な成果をまとめる。②については、イベント後に生まれた日本人学校に対する地域からの新たな需要に基づく活動について具体的な成果をまとめる。

①本物のグローバル環境に身を置くことによる国際理解教育に関する成果

自他の文化に対する理解に関して

本校は桜の花が咲き乱れる日本風ブースの中で、日本的な題材・技法・素材をもとにした作品準備を進めることとした(資料①写真「日本人学校作品展示ブース」参照)。小学5年生は水墨画の作品づくりに取り組んだ。芸術祭参加後には、児童作文で次のような記述がみられた。

「水墨画は学校の図工の授業でかきました。水墨画をかくのは今回が初めてでした。なのでうまくできるか

不安でしたが、自分の中では良い作品ができたと思います。わたしは花をかきました。工夫したところは2つあります。1つ目は色に濃淡をつけたことです。2つ目は筆の穂先が細い筆を選び、花びらを1枚ずついねいにかいたことです。当日わたしの水墨画がかざられているブースへ行くと、たくさんのチリ人が集まっていました。みんなうれしそうに、楽しそうに見ていました。」(資料②児童作文より、また資料①写真「小学部5年展示作品制作」も参照)

このような作文からは、日本のことを知らない相手、または知りたいと思っている他者に日本文化を発信していくことを目的として、作品制作に取り組んだ経験が、自己の日本文化に対する理解をより深めることにつながったことがうかがえる。また、日本文化といっても多岐に渡り、教員自身が自信をもって指導にあたれるものは何か問われればそれほど多くを指導できる人はいない。となると教員自身が必死に学び、研究する必然が生まれる。日本文化発信の場は、教員の指導力向上に直結するということも同時に感じた。

一方で、他校の展示ブースを見て日本人学校の子どもたちが素材や色づかいの違いに気が付いたりする様子もみられた。

さらに、「日本」を伝えるという点において大変興味深く感じたことがあった。区の担当者への事後インタビューにおいて、「日本人学校の先生たちが土曜日にも関わらず全員で子どもたちのステージ発表を手助けしていたことが素晴らしいと思った。イベント終了後の展示ブースの片付けでは、作品展示のために木枠に打ち込んだホチキス針をきれいに抜き、まとめていたことに驚いた。さらに、自分たちのブースの片付けが終わると他校のブースの片付けまで手伝っている日本人がとても興味深かった。」という話があった。自分たちとしては「使った場所を元通りに戻す」という日本では当たり前のことをしたに過ぎず、また、自分のブースの片付けが終わったからと言って何もせずに帰ることはできないという、やはり当たり前のことをしたつもりでいた。しかし、改めてそういう話を聞くと、異文化の中では日本人の行動が目を引くこともあるのだと感じた。日本人学校を1歩飛び出してみるとそこは異文化であり、自分たちの行動1つ1つが隠れた文化発信につながっているということが、日本では得られない新たな気づきであった。

異なる文化をもった人々と共に生きていく態度に関して

芸術祭当日、作品展示ブースにて子どもたちの折り紙作品を展示した(資料①写真「日本人学校展示ブース」「折り紙コーナー」参照)。ブースを訪れたチリの子どもたちやその保護者、他校の教員は折り紙の折り方にとっても興味を示していた。その様子を見て折り紙体験コーナーを急遽用意した。結果的に作品展示中、日本人学校の折り紙ブースはチリの人たちに大人気で、長時間コーナーから動かずに手裏剣をいくつも作る子どももいた。ブースに居合わせた現地採用講師や派遣教員、それから本校の子どもたちみんな、折り紙の折り方を教える時間が生まれることになった。このような場面は当初の想定にはなかったが、より自然な形で、より必要感に基づいた交流が実現したともいえる。本物のグローバル環境のなかで、教師にはこのような「相手がいる中での『とっさにさっと』力」が磨かれたといえる。

また、この折り紙ブースでの活動について、児童の次のような作文がみられた。
「本番では、先生方が折り紙をチリ人に教えていました。私もチリ人に教えたいと思ったのでチリ人に教えました。私はスペイン語があまりできないので、教えづらかったです。でも、教えたチリ人の子は『グランダス!』と喜んでくれました。私は、教えたやりがいがあったなと思いました。」(資料③児童作文より。また資料⑤児童作文にも同様の記述が見られる。)

この記述からは、芸術祭担当者が言っていたように、芸術分野における交流が言葉の壁を越え、異なる文化を持った人々同士の交流を生んだことがうかがえる。

国際社会に生きる日本人としての自覚に関して

芸術祭参加後の児童の作文には、以下のような感想があった。

「歌を2曲歌い終わったら、ソーラン節のように拍手をもらいました。でもさっきの拍手とちょっと違うような気がしました。後で先生に聞くと、先生はこう言いました。『さんぽを歌った時には“おお。”という顔で、聞いていたよ。でもチリ国歌の時の顔は“何で歌えるんだ…”という顔で聞いていたよ。』と言っていました。私は、だから違う拍手のように聞こえたのかなと思いました。きっとチリ人は違う国の人たちが自分たちの国の歌を歌ってくれたので感動したのだと思います。」(資料③児童作文より)

このような感想からは、自分たちの制作した作品を、現地の人たちが興味深そうに鑑賞している様子を見て、また自分たちのステージ発表を同じように多くの人たちが参観し、大きな拍手を送る様子を見て、日本文化に対する外地での関心の高さを子どもたちが実感することができたことがうかがえる。また、チリ国歌を大切に歌っていることが相手にとってどれだけ喜ばれることか感じることもうかがえ、日本の文化を発信することや相手の文化を大切にすることの価値を、子どもたちが実感できたといえる。

別の児童の感想、「来年の第2回目のロパルネチェア芸術祭にも参加したいです。…今度は現地の人との交流を大事にしていきたいと思います。」(資料④児童作文より)からは、異なる言語や文化をもつ人たちと積極的に関わっていかうとする態度が養われ、国際社会に生きる自覚が生まれていることがうかがえる。

以上のような、本物のグローバル環境に身を置くことによる国際理解教育については、保護者からも芸術祭実施後以下のような声が寄せられた。

「いつも子どもたち一人一人にきめ細かな指導ありがとうございます。昨年度、今年度と地域との交流や発表の機会が増え、言語・文化・表現方法等とても良い刺激を受けて素晴らしい経験をさせていただき感謝しております。先生方のご準備は大変だったと思いますが、本当にありがとうございました。」

その他の保護者からも、「チリでしかできない経験をさせてもらえてありがたい」といったフィードバックをたくさんいただいた。

②地域の需要に基づく日本人学校の活動の展開

このような芸術祭参加を通して学校の外へ飛び出していった結果、日本人学校に対する地域からの新たな需要が生まれ、活動が広がった。イベント参加後の評価が元になり、後日開催された区の音楽イベント「音楽の日」に出演してほしいとの依頼を受け、実際に同イベントにて和太鼓クラブのメンバーが和太鼓演奏を行った。区内にある学校としての日本人学校の存在を、地域の人たちにさらに広く知ってもらうことができた。また、これまでも声をかけてもらっていた「ユニベルシダ・デ・チレ・デ・サンティアゴ(地元大学)日本語学科の学生主催による日本祭り」への参加に対しても前向きに関わる気持ちが職員の中に生まれ、4～6年生の子どもたちのソーラン節発表という形で参加が実現した。日本文化に興味関心をもつチリの学生たちを前に、ソーラン節を踊り、大歓声とたくさんの拍手をもらうことができた。ソーラン節発表以外に、学生が準備した日本文化に関する模擬店を子どもたちが巡り、日本と遠く離れたチリに日本文化を一生懸命勉強している人たちがいるということを間近に感じることもできた。

以上のように、日本文化の理解、他国の文化の理解および尊重、世界の人々との共生、国際社会の中での日本人としての自覚など、グローバル人材の柱ともなるべき態度や知識、能力を子どもたちに培っていくなかで、今回の実践には当初想定した目的以上の成果があったと感じている。そのなかで、最も大きな成果は、今後このような実践をきっかけとして、グローバル人材育成に向けた日本人学校の機能が向上する可能性があることが付いたことである。本研究のきっかけとなった芸術祭は、チリ国内の他市、他区を見ても類を見ない取り組みであり、比較的治安の良いとされているチリ以外の国では開催が難しいイベントといえるかもしれない。しかし、学校間の打ち合わせでイベント的に行ってきたこれまでの現地校交流とは違い、

このような地域に根ざした芸術祭への参加は、単なるイベント参加にとどまることなく、子どもたちに、「日本文化を知りたい同年齢の子どもたちが世界にいること」(インターナショナル校も多く、地域に出ればそこには多くの国の子どもたちがいる)、「そういった子どもたちとどのようにコミュニケーションをとるか。」さらには、「それらの人とこの世界で人生を重ね合わせ、どのように共存していけば良いか。」について考えさせ、グローバル人材育成に迫っていくことができるのではないかと考える。相手校を決めて交流することの意義とは別に、地域コミュニティの一部になるという本研究は、どの国や地域でも大きな教育的意義を生むのではないかと考える。

8. 今後の展開・取り組むべき課題

○今後芸術祭参加を進めていくためにクリアすべき課題

・教育課程への位置づけ(カリキュラムマネジメントの視点から)

ロバルネチャ芸術祭への参加の依頼があったのは芸術祭当日の3か月前の7月であり、年度内の教育課程内の行事として組み込むことが難しかったため、任意参加の行事とした。年度当初の予定になかった芸術祭参加について参加の可能性を職員の中で議論した際に、「参加は子どもたちの成長にとっても価値がある」として提案した自分の他に、「参加すべきでない」という立場からの意見もあった。理由として、受験を控える中学3年生の問題、学習発表会や運動会といった大きな行事とのバランス、土曜日開催を教育課程内の活動とするかどうか、子どもたちの負担増、教員の負担増が上がった。

最終的には校長判断もあり、参加の結論となったが、中学3年生を含めあくまで参加は保護者の判断に委ねる形をとることになった。(結果的には中学3年生全2名及びその兄弟1名が不参加であとは全員参加となった)

実施後の職員反省では、子どもたちの経験という点で全体的には成果が得られたという意見が多かったものの、次年度に向けての話になるとやはり実施前同様、子どもの負担や保護者の負担、教員の負担、過密日程の声が上がリ、年間計画の中でどうバランスをとっていくか検討が必要とのまとめとなった(芸術祭開催日が大きな検討材料)。そこで、今回の芸術祭について年間指導計画における位置付けを考察した(資料⑥芸術祭の年間指導計画上の位置づけ)。

今後継続して参加をしていくことを考えた場合には、①芸術祭参加を教育課程内にきちんと位置付けること、②各教科・領域等の教育活動との関連を踏まえた教科横断的なカリキュラムづくりにより他の教育活動(教科学習や行事)とのバランスを保つこと、③教員間で芸術祭参加により得られる教育効果を共通理解すること、これら3つの課題をクリアしていく必要があると考える。

また、区の担当者への事後インタビューにて次回の芸術祭の構想について話を聞くことができた。それによれば、サンチャゴ市あるいは区が抱える問題として環境問題が挙げられる。取り分けリサイクルについての関心は急速に高まっている。次世代の子どもたちに対する環境問題への意識付けをねらいとして、プラスチック製品のリサイクルをテーマとした学校間協働作品制作を検討中とのことであった。今後様々な取り組みが期待される芸術祭について、開催のねらいを日本人学校としてしっかり掴み、本校の教育活動に取り入れていくことは、現地の地域の抱える問題解決に芸術を通して子どもたちが参画していくという本物のグローバル環境でのより深い国際理解教育の実現につながるだろうと考える。

7. まとめ

自他の文化に対する理解、世界の人と共に生きていこうとする態度、国際社会の中における日本人としての自覚といったグローバル人材育成の柱を子どもたちに培っていくには、本物のグローバル環境に身を置くことが必要不可欠である。今回の芸術祭参加のような取り組みはまさに海外日本人学校の置かれた環境を十分に活かした実践であると考え。学校を1歩飛び出せばそこにはグローバル教育の舞台が広がっている。

～Mix Lesson の充実に向けて～

シドニー日本人国際学校

Mix Lesson 担当

幅 貴啓

1 概論

シドニー日本人国際学校は、世界的にも珍しい、2つのカリキュラムを実施している1つの学校である。1つは文部科学省のカリキュラム（日本人学級）、もう1つはオーストラリアのNSW州のプログラム（国際学級）である。この日本の文化とオーストラリアの文化を、互いに体験的に学ぶことができるように、シドニー日本人国際学校では、ミックスレッスン（音楽・図工・体育・プログラミング）を実施している。

ミックスレッスンとは、同学年にあたる日本人学級と、国際学級の児童と一緒に学ぶ「合同授業」の事で、音楽・図工・体育・プログラミングの授業である。1年生（Year 1）から6年生（Year 6）までを対象に行っている。

日本人学級と国際学級は、立地上でも隣接学級として位置づけ休み時間など一緒に遊んだり、ランチを食べたりするなど、異文化を体感するには、非常に有用な状況にある。その中で、さらに国際理解の能力や協働活動の能力を育みたいと考え、実践に取り組んだ。

2 Mix Lesson の目的

Mix Lesson を通して、日本人学級と国際学級の児童が交流活動をする事で、児童の国際理解や協働活動の能力を高めることを目的としている。

3 実践

3-1. 目的の変更および国際理解教育

To increase student' language skill,
friendships & collaborative learning.

学生の語学力や友情&協働活動の能力を高める。

2018年度までは、上記の目的が掲げられていた。しかし、シドニー日本人国際学校での日本人学級は、通常の基本課程の英語とは別に、さらなる英語学習を、小学校では週に5時間行っている。これを「English」（外国語として学ぶ英語）と呼び、「English」の授業を指導する英語科の教員は、オーストラリアの教員免許を保持するネイティブスピーカーである。英語科の教員は、日本の文化に精通しており、日本人特有の発音や日本人ならではの習得の特徴も熟知している経験豊かな教師陣である。英語に初めて触れる児童も安心して学習に取り組む事ができている。「English」では、習熟度別学習（3コース）が行われている。すべてのレベルにおいて、英語の楽しさを味わうため、コンピューターを使つての学習やゲーム、歌なども取り入れながら授業が進んでいる。そのため、

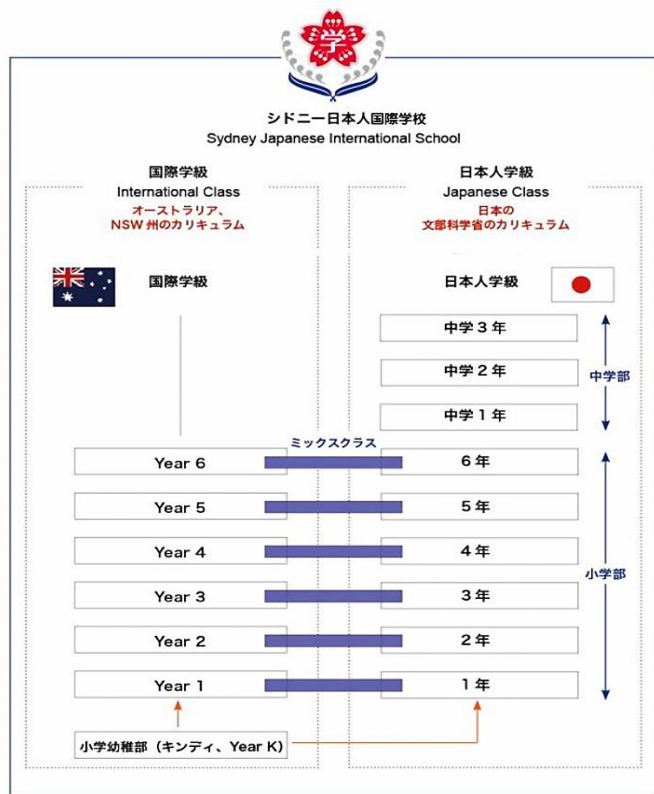


図1 シドニー日本人国際学校構成図

Mix-Lesson において言語力の向上を目的とするよりも、国際理解の能力を高めることの方が有用であると考えた。

国際理解教育のために

- ① 相互文化理解の能力
- ② 自己肯定感
- ③ コミュニケーション能力

の3つの資質・能力を高めることを柱とし、Mix-Lesson の充実を図りたいと考え、目的の変更を行った。詳細については、**3-2** で述べる。

国際理解の能力	相互文化理解	世界的な視野をもち、異文化を理解、尊重する共に、その文化の中で生きる人々と共生できる力
	自己肯定感	日本人としてや、個人としての自己の確立を図る
	コミュニケーション能力	相手の立場を尊重、受容し、自分の考えや意思を表現、伝えることのできるコミュニケーション能力

表1 国際理解の能力を構成する三要素

3-2.Mix-PEにおける目標の設定

本校の教育目標は

本校で学んだ子どもたちがグローバル社会に貢献できる「架け橋」になり、世界をつなぐ人になる教育を行う

- ① 自ら学ぶ姿勢を持ち、グローバル社会を勝ち抜ける強さ・真の学力を持つ児童・生徒
- ② コミュニケーション能力に優れ、どの国の人も対等につきあえる児童・生徒
- ③ おおらかな心とともに細やかな心遣いを持ち、チャレンジ精神に富んだ児童・生徒



ここからMixLessonでの目標を以下のように設定した。

Mix-PE の目標

体育の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す

国際理解の目標

色々な国の児童との交流を通して、違う考え方

や生き方に会い、自分の世界を広げたり、視野を広げたりする中で、協働活動の能力を高め、共に生きていくための資質や能力を育成することを目指す

3-3.Mix-PEにおけるきめ細かな指導に向けて

日本人学級における4学期、国際学級におけるTerm1は、Sports day（運動会）へ向けての取り組みが始まる。Sports dayでは、全校演目として、日本文化を体験的に伝えるために、南中ソーランを踊ることにした。北海道の漁師の動きがモチーフとなっていることを伝えたり、動きの巧みさなど感じ取らせたりし、両学級の関心を高めた。日本文化を伝えるにあたり、中心となるのは日本語での指導となる。そのため、言語が通じない国際学級の児童に対して、きめ細かな指導となるように、いくつかの手立てを考えた。

	きめ細かな指導の手立て
1	国際学級の先生に事前に指導内容を理解してもらえるように、打ち合わせを行い、指導内容を表にまとめる。（表3） または、授業時間内に一緒に踊ってもらい、大事なところを休憩のときに復習してもらう。 [実態を見届けるために行う]
2	児童のダンスの動画を撮影し、国際学級の先生に見せながら、修正してもらいたい箇所を説明し、個別指導を行う。 [学習状況を見届けるために行う]
3	高学年はダンスリーダーを立て、リーダーにポイントとなるところを見せるように促し、子どもたち同士で学び合う環境づくりを行う。 [学習状況を見届けるために行う]
4	日本人学級と国際学級のダンスを互いに見せ合い、見せるポイントを確認しながら、良かったところ、直したほうが良いところなどをふり返り、アドバイスし合う機会をつくる。 [定着状況を見届けるために行う]

表2 ダンス指導のきめ細かな指導のための手立て



写真1 互いのよさを見つけあう練習風景

内容	ねらいなど(内容や指導)	打ち合わせた内容 等
基本の運動 並び方、 ラジオ体操（スポーツデーのため）、ゲーム	背の順で並ぶ方法を覚える。前へ習えのやり方を覚える。（キンディーでは前へ習えが前の友達の肩をもつやり方でふらふらしがちなので、1年生はこぶし1つ分離れると指導）「体操隊形に開け」の練習。笛の合図で一斉に動くこと。ラジオ体操の音楽になれ、音楽に合わせて体を動かすこと。前の人のまねをして体を動かすこと。簡単なルールのゲームを行うことにより、友達とルールを守って楽しく遊ぶこと。	1年生に入学してすぐだが、スポーツデーに向けた並び方、指示への従い方を学ばせる。
基本の運動 表現リズム遊び	ソーランの音楽に合わせて、体を使って踊ること。友達と動きを見合い、よい動きをまねること。	スポーツデーのダンスの音楽を知り、まねをしながら踊る。

表 3-1 指導内容をまとめた計画表(Y1 一部抜粋)

内容	ねらいなど(内容や指導)	打ち合わせた内容 等
マット運動	マット運動における基礎となる動き作り 後転、開脚後転、伸膝後転	マット運動で3種類の後転を行うことを打ち合わせた。 基礎となる動き作りは、各学級での授業でも行っている内容なため、日本人学級の児童が国際学級の児童へ内容やポイントを伝える方法をとって進めた。 後転系の学習では、同じマットにいるメンバー同士でアドバイスし合いながら進めるように指示した。 日本語で指導し、子ども達も日本語で交流した。
ソーラン節 2 回目	ソーラン節の中心となる動きについて ・オープニングの構え ・波	児童を一人、事前練習させておき見本として動きを見せている。 日本語、英語両言語はなせる児童なので、英語で細かな点まで伝えてもらっている。国際学級の先生にもその場でポイントとなる動きについては、英語で子供たちを指導してもらったようにした。

表 3-2 指導内容をまとめた計画表(Y 6 一部抜粋)

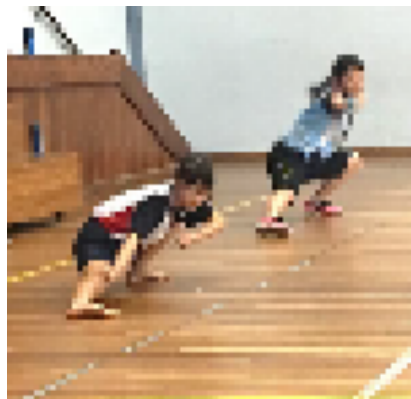


写真2 ポイントの提示風景



写真3 南中ソーランの練習風景



写真4 器械体操の練習風景



写真5 器械体操の練習風景②

		Jap	Int	内容(Contents)	
4/22	1 学期 ／ T e r m 2	1			
4/29		2	1	Sports'day Competition Lesson 陸上競技 (50～100m走、棒引き、綱引き、大玉ころがしなど)	
5/6		3	2		
5/13		4	3		
5/20		5	4	Sports'day	
5/28		6	5	①	
6/3		7	6	②	
6/11		8	7	③	
6/17		9	8	④	
6/24		10	9	⑤	
7/1		11	10	⑥	
7/22	2 学期 ／ T e r m 3	1	1	Cross country Lesson	Dance Lesson or AFL Lesson
7/29		2	2	Cross country	
8/5		3	3		
8/12		4	4	Australia の文化を体験的に学ぶ ために、ダンスやAFLの外部 講師を招き、練習する。 (2年に1度演目の変更)	
8/19		5	5		
8/26		6	6		
8/2		7	7		
8/9		8	8	⑦	
8/16		9	9		
8/23		10	10		

		Jap	Int	内容(Contents)	
10/14	3 学期 ／ T e r m 4	1	1	Australian cricket Australia で盛んなスポーツの ひとつである、クリケットのル ールやゲーム性などを野球など と比較しながら学ぶ	
10/21		2	2		
10/28		3	3		
11/4		4	4		
11/11		5	5	Swimming Lesson スイミング	
11/18		6	6		
11/25		7	7		
12/2		8	8		
12/9		9	9		
12/16		10	10	For graduation	
1/7	4 学期 ／ T e r m 1	1			
1/14		2			
1/21		3	1	Japanese Mechanical gymnastics 日本の体育カリキュラム にはあ るがオーストラリアにはない、巧みな 体の動きや安全性を学ぶ (マット運動や跳び箱)	
1/28		4	2		
2/4		5	3		
2/11		6	4	Sports'day dance Lesson 日本の文化を体験的に伝える ために、学校演目として日本の 踊りを取り入れる。 (2～3年に1度演目の変更) 2019年度は高学年は南中ソーラン 低学年は爽涼鼓舞	
2/18		7	5		
2/25		8	6		
3/4		9	7		
3/11		10	8		
3/18			9		

表 4 Mix-Lesson 年間計画 (週 1 時間)

本校の Mix-PE はオーストラリア州政府のカリキュラムも一部取り入れ(表 4 中の緑のハイライト部分)、また学校行事に向けた準備(表 4 中のピンクのハイライト部分)もあるため、表中①～⑧が担当教師の裁量で内容を決められる枠である。オーストラリア文化でもあるクリケットや日本独自のカリキュラムでもある器械体操などを、体験的に学べるように配慮している部分もある。(表 4 中の黄色のハイライト部分)

年間 37 回の Mix-Lesson の中で、相互文化理解を深めることができるカリキュラムと、それぞ

れの国にある独自のカリキュラム、そして担当者が国際学級の先生との相談により決めることのできるカリキュラムの特性を考えながら、Mix-Lesson の目的が達成できるように、国際学級の先生と取り組む。

4 今後の Mix-Lesson の充実に向けて

4-1 一年間指導計画の改善案 (担当者裁量の時間枠をどのように使うか学習内容と指導法の再検討)

日本人学級のみでは、学級内児童数が非常に少ない状況である。例えば野球やサッカーのような大人数で Game をするスポーツをすることができない。そのため、表 4 の担当者裁量の①～⑧では国際学級と Game を多くと取り入れた。各学級の単独の体育でルールを教え、練習をしたり、工夫点や戦術を考えたりしながら、Mix-Lesson に臨めば、児童に単独体育の必要感が生まれてくると考えられる。そして、自然と Mix-Lesson が楽しみになってくるのではないだろうか。

また、担当教員が替わっても、子どもたちの学びが積み重なり、より深まっていけるように、Mix-Lesson のカリキュラムの枠組みをしっかりと構築することが大切である。その枠組みの中で、学習内容や指導法にはいくつかの選択肢を設け、子どもたちの適性や担当教員の専門分野などに合わせて柔軟に対応できるようにしておきたい。

来年度より本校には iPad が導入される。子ども同士が、互いの姿を撮影し合いながら、動画を根拠にどのような動きをしていたのか、認め合ったり、修正していったりする道具として活用していきたい。

5 あとがき

今回の、本校の 2018 年度「教育実践研究」事業にてご指導いただきました、東京学芸大学附属大泉小学校教諭 松井直樹先生 久保幸恵先生、及び東京学芸大学教育学部准教授 阿部始子先生には大変感謝しております。謹んでお礼申し上げます。



写真6 高学年全員ソーラン練習

	低学年	中学年	高学年
興味・関心	運動に進んで取り組むことができる だれとでも仲よく踊ることができる	運動に進んで取り組むことができる 友達と励まし合って練習や発表をすることができる	運動に進んで取り組むことができる 友達と助け合って練習や発表、交流をすることができる
技能	爽涼鼓舞のリズムに乗って踊ることができる	ソーラン節のリズムの特徴を捉えて、軽快なリズムに乗って全身で弾んで踊ることができる	ソーラン節の特徴をとらえて、音楽に合わせて簡単なステップや動きで踊ることができる
思考・判断	簡単な踊り方を工夫することができる	自分に合った課題を見付け、練習や発表の仕方を工夫することができる	自分やグループの課題の解決に向けて、練習や発表の仕方を工夫することができる

表5 表現活動の発達段階と観点

申請日: 2018年 11 月 22 日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
グローバル教師事務局 御中

2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクト 報告書

1. 研究代表者	
(1) 氏名(ふりがな)・役職・所属校での年次	増田 恵津子(ますだ えつこ)・教諭・2 年次
(2) 所属校	ジャカルタ日本人学校・補習授業校
(3) e-mail アドレス	
2. 共同研究者氏名(役職・派遣教師か否か・所属校での年次も併記してください)	
3. 研究課題名	
在外教育施設における古典教育の実践	
4. 申請時の状況と課題	
ジャカルタ日本人学校中学部2年生76名において、国際家庭(両親のどちらかが非日本語話者)の割合は30パーセントに至る。日本に住んだ経験がない、家庭では日本語を使用しない生徒にとって国語に対する苦手意識は高く、特に古典教材は敬遠したいものになっている。特にそのような生徒に対して、古典の世界に親しみ、ものの見方や考え方を知り、我が国の言語文化を大切にする態度の育成を図るための授業開発の必要を感じた。	
5. (支援を受ける)目的・ねらい	
従来は、『平家物語』の冒頭文で当時の歴史的背景や当時の人々の思いをつかませる。『扇の的』では『平家物語』独特のリズム感や源氏と平家が名誉を賭けて戦う姿を臨場感あふれる文章で読み取らせる。」というような授業を組み立て、実践していた。しかし今回、改めて在外教育施設で学ぶ生徒の実態により合ったグローバルな視点での授業を行うにはどうしたら良いのか、改善点は何なのかについて取り組もうと考えた。実践的、具体的なご支援を頂きたいと思い応募した。	
6. 取組内容(※指導を受けた内容も記載のこと)	
①東京学芸大学附属国際中等教育学校主幹教諭杉本紀子先生に「平家物語」「扇の的」の指導案をメールで指導していただき、改善点等をご返信いただき、再度指導案をメールした。 ②2019 年 1 月 21 日・22 日、日本より杉本先生にジャカルタ日本人学校にお越しいただき、実際に増田・川原の授業を参観していただき、ご指導いただく。事後研修会に参加していただき、研究研修を行う。 ③杉本先生より授業観察記録レポートのメールをいただき、振り返りを行う。	
7. 成果・効果等(※詳細に記載し、成果物があれば添付のこと)	
① 単元テーマを概念で組み立てる国際バカロレア教育の視点でのアドバイスをメールで受けた。今までIBの視点で指導案を書いたことが無かったが、在外施設で勤務しているのであれば率先して取り入れていくべきであるという思いに至り、再度指導計画を考え直した。単元テーマを概念中心で組み立て、単元の大きな問い、そして教材内容に関する大きな問いという流れは今まで意識できておらず、指導案作成の改善に役立てることができた。	

②・③ 事後研修会、および杉本先生からのレポートで特に学んだことは以下の点である。

☆ メタ認知と再構築

・生徒の学びをメタにとらえるために必要なねらいや目標を教師側主体で提示すること。

ジャカルタ日本人学校において小学部と中学部の国語科の授業を比較したときに、「めあて」を児童・生徒側から発信するのか、教師側から発信するのか、意見が分かれることが多かった。小学部では児童側からその時間の「めあて」を見つけ、授業を行うことがほとんどである。中学部では毎時間教師側からの提示であった。「めあて」を児童・生徒側から提示するのが、主体的な学びにつながるのかという疑問があったのだが、今回の指導を受けて「めあて」の提示は教師側からでも構わないのではないかと考えた。それよりも生徒の学びをメタに捉えるためには教師側がねらいや目標を整理した上で提示することが大切であり、その整理の仕方によって生徒にとって何がわからないか、何が苦手かが整理でき、「めあて」の達成ができたかどうかを振り返ることができるのではないかと考えた。

☆ 班活動での指示

・指示の明確化

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、これまでできる限り授業内で班活動を取り入れてきた。今回、指摘していただいたのは班活動を行うにあたっての教師側の言葉かけについてである。「話し合い」という言葉ですべてを済ませてきたところがあった。活動の目的に沿った言葉かけが必要だったように思えた。「情報共有」「意見交換」「討論」「相談」など具体的な言葉かけをすることで班活動の合理化も今後図れるように思う。

8. 今後の展開・取り組むべき課題

従来の古典教育から新しい視点での古典教育に一步進めることができた。今後の展開・課題は上記に述べた点以外にも「目標―授業―評価の過程において、生徒と共有すべき見通しをもつ」ことを意識して授業をしていきたいと考える。今回、ご指摘のあった丁寧すぎる部分、ややもすれば受け身になってしまう活動をもう少し生徒に自主的に活動させたいと考えた。そのための工夫、仕掛けを今後は具体的に考えていきたいと思う。

今回は「古典を学ぶ意義」を生徒に感じさせられるような授業展開を試みた。それは、ご指摘にあったように一朝一夕でつかめるものではないし、日本人のアイデンティティを押し付けるような乱暴なやり方ではなく、教師側で意識しながら進めていけばいいのではないかと考える。

7. まとめ

この度「教育実践研究」支援プロジェクトに参加させていただいたことは、自身の授業力向上だけでなく、ジャカルタ日本人学校で勤務する教員も多くのことを学ぶきっかけとなった。杉本先生のお話にあったように我が国の教育システムは世界に誇るべき素晴らしさをもっている。それは学習指導要領のきめ細かやであったり、教授の丁寧さであったりする。それらのことを再度確認することができた。自身も海外駐在経験があり、日本の義務教育の良さを他国の教育システムと比較して感心した経験がある。そのような教育を海外に輸出していくというプロジェクトはまさに在外教育施設の在り方を世界に発信していくことに他ならないということに大いに興味をもった。国語科の授業改善だけでなく、在外教育施設で育った生徒たちの行く末について考えたり、日本の教育システムを相対的に考えたりする機会をいただけて感謝している。

※記入欄は適宜拡張してください。

申請日: 2018年 3月 18日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
グローバル教師事務局 宛

2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクト 報告書

1. 研究代表者	
(1)氏名(ふりがな)・役職・所属校での年次	澤田 崇明 (さわだ たかあき) ・ 教諭 ・ 2年目
(2)所属校	ダッカ (日本人学校)・ 補習授業校
(3)e-mail アドレス	
2. 共同研究者氏名(役職・派遣教師か否か・所属校での年次も併記してください)	
3. 研究課題名	
日本文化とバングラデシュ文化の「比較」と「融合」を通じた学びの追究 ～ベースボール文化に焦点を当てて～	
4. 申請時の状況と課題	
本校があるバングラデシュ、ダッカは一昨年に起きてしまったテロ事件の影響で安全管理が厳重になり、当地の日本人社会は日常生活において様々な制約がなされている。そのため、学校行事も縮小されたり、社会見学や国内での宿泊行事を実施することができなかつたりするというのが現状である。実際に様々な場所に足を運び、自分の目で見たり、体験したりすることは難しいため、バングラデシュに住んでいるこの機会に子どもたちが見聞を広め、国際理解を深めるためにも、地域の文化を教材にした学習を展開する学校の役割は重要となる。さらに、日本人学校の特性として、日本の文化や習慣について触れる機会が少なくなってしまうので、これらについても学んでいく機会も並行して設けていくことが望ましいと考える。以上のことを踏まえて、本校に着任した時から、年度につき1つの地域教材を扱った授業に取り組んできた。 この2つの実践については、帰任する際の研究報告に生かしたり、帰任してからの実践に役立てたりするために力を入れて構想を練り、できる限り記録をしてきた。また、それぞれの実践において、子どもたちの学びには得るものがあつたような実感が授業者としてあつた。発想が乏しく2つとも似たような学習課程となったが、それゆえにこの2つの実践から考察できるものがあるのではないかと感じていた。しかし、これら2つの実践を結びつけるような研究の視点やそれぞれの実践のまとめ方が分からないという課題があつた。	
5. (支援を受ける)目的・ねらい	
今回この教育実践事業に募集し、支援を受けたいと考える目的は2つあつた。 1つ目は、上にも述べた研究の視点や研究をまとめていくにあたっての方向性について指導助言をいただくことである。本校は小規模校であり、小学生、中学生がいるため、教科担任制で授業を行っている。昨年度行ったカレーを扱った実践は自分が担任をしていた小学5・6年生の複式学級の総合的な学習の時間において行った。一方、今年度のベースボール型ゲームの実践は担当している小学5・6年生と中学部合同の体育科の授業において行った。教科も対象も違う実践において、研究をまとめていく方法を自分だけで考えるのが困難であつた。 2つ目は、研究を発表する機会がある可能性があつたことである。これまで研究してきたことは、特に周囲に	

伝える機会もなく、自分の中で積み重ねてきているだけに過ぎなかった。どこかで発表する機会があればいいという思いはもちながらも、どのようにしていいのか分からず、さらにはそこに時間を費やすことができていなかった。また、周囲に発表せずに、自己完結で終わってしまえば、客観的な意見をもらえずに我見に陥るのではないかという危惧もあった。募集要項にあったような研究の成果を発表する機会があればぜひ挑戦したいと思っている。また、それが厳しかったとしても今後研究を発表していくために必要なことを助言してもらえるのでは思った。

6. 取組内容（※指導を受けた内容も記載のこと）

単元を構想するにあたって、日本においてもバングラデシュにおいても馴染みの深い両国の文化を教材にして追究を深めることにした。その教材として1年目はカレーを、2年目である本年度はベースボール型ゲームを取り上げた。カレーは両国において国民食であり、ベースボール型ゲームとしては日本では野球、バングラデシュにおいてはクリケットが盛んであるため、子どもたちが興味を持ちやすいと考えた。さらに、それぞれの学習過程において、両国の文化を「比較」し「融合」していくことを幹とした。つまり、教材を融合したものを創ること（「日本人もベンガル人もおいしいと思うスペシャルカレーづくり」「野球とクリケットを学んだ上で全校児童生徒みんなが楽しめるオリジナルベースボールづくり」）を単元全体の学習課題として提示し、その過程において両国の文化を比較することができる学習活動を取り入れた学習課程とした。融合していくという学習課題のためには、比較してそれぞれのよさや違いを知ることが必要となる。そして、比較したことを生かして融合していくことで子どもたちが新たな価値を生み出すとともにお互いの文化への理解が深まると考えた。さらに、今回取り上げたそれぞれの教材は似ている部分もあるが、本質的には随分と異なるため、比較した時に違いが明らかになるとともに、融合していくことには無理がある、矛盾があるという葛藤が表れると予想される。その葛藤があるがゆえに、課題に対する解決能力も深まると考えた。

カレーの実践は総合的な学習の時間で行い、昨年度すでに終えていた。ベースボール型の実践においては、今年度体育科として授業を行っていた。また、この実践は2学期から3学期にかけて行っており、アドバイザーの大村講師が訪問された期間においても実施中だった。訪問された際には実際の授業を見ていただいた。また、それを踏まえて研究の方向についても話し合わせていただいた。

同じような学習過程にはなっているものの今年度行っているベースボール型においては体育科の側面が強いため、2つの実践を無理に結びつけるよりも総合的な学習の時間と体育科の合科的な単元として研究をまとめる方がいいのではないかという助言をいただいた。申請時の課題設定を改めて本プロジェクトへ報告する実践は、今年度のベースボール型の実践にのみ焦点を当てて研究をまとめることとした。（詳細については申請時に添付した指導案等の資料を参照。）さらに、講師からは異文化理解と国際理解教育の違いについて講話をいただきながら、本実践においては国際理解教育としての効果がありながらも、体育科のねらいについても深められるというメリットがあるという指摘をいただいた。また、アドバイザーの上田先生からは、今回の単元では、ただ異文化であるクリケットを取り組むのではなく、両文化を融合させていく取り組みによって「国際理解教育」を、「相手の文化を理解すること」という「理解」の教育として捉えるのではなく、「双方のよさを融合させ、両者にとって価値あるものを創造していこう」という「態度」や「創造性」の教育として捉えているという意見をいただいた。

実践してきたこと、指導助言とその後の授業、子どもたちの様子やふり返りなどから本実践について考察した。

7. 成果・効果等（※詳細に記載し、成果物があれば添付のこと）

1. 単元提示の授業（導入）

はじめに、「ろくむし」という昔遊びに出合わせるところから学習を始めた。「ろくむし」は子が鬼にボールを当

てられないように、2つの円を6往復するという遊びである。その後、「ろくむし」を実際にやってみた感想を交流した。その中で、最初に行った「ろくむし」がクリケットに似ていると気づいた子どももいた。その交流後に、単元名「JSD オリジナルベースボール」を提示して、今後の学習について予想させた。子どもたちは、「野球のルールを変えてオリジナルベースボールを創る」「クリケットと野球を合わせる。」「用具やルールを自分たちにあったベースボールを考える。」と単元名から様々なことを想起した。

授業の最後には、「それぞれの国で人気のベースボールを学び、JSD の伝統になるようなオリジナルベースボールを創る。」という学習課題を伝え、それを踏まえて再度「ろくむし」を行い、ろくむしは単元を通して取り組むことを確認した。

子どもたちの様子からこれから自分たちが好きな野球やバングラデシュで人気のクリケットに取り組めることを楽しみにしているようだった。また、子どもたちが書いたふり返しからも、自分たちに合ったものや新たなゲームを創るという学習に挑戦したいといった意見が多く、この単元学習に対して意欲的な姿勢が見受けられた。

2. クリケットを学ぶ

2つのベースボールを学んでいくにあたって、はじめにクリケットに取り組んだ。しかし、一般的なクリケットのルールで行うのではなく、特性だけは残したままルールを簡易化したゲームを行った。しかし、提示されたルールからよりみんなが公平にかつ楽しめるようにするために、ルールは自分たちで変遷していった。

学習していく中で、チームで勝つためにどのようなことがポイントになるのかを確認していった。攻撃については「守備がいらないところをねらって打つこと」「遠くへ打つこと」「相手やボールを見てすばやく走ること」が守備については、「打者に応じて守備の隊形を考えること」「捕ったらすぐにコーンまで送球すること」「ボールを持っていない守備はコーンの近くへ移動したり、中継したりしてカバーすること」が、子どもたちが考えたポイントだった。

時間を重ねるごとに、これらのポイントを意識しながら技能が向上していく様子が見られた。さらに、チームとしての技能を高める時間では苦手な仲間が上手くなるように教えたり、その仲間に応じたドリルを行ったりする姿が見られた。

クリケットについて学習の終わりのまとめとふり返しとして、今回学んだクリケットの良さやオリジナルベースボールづくりに生かしたいことを考えさせた。子どもたちからは「360° どこにでも打てること」「ウィケットに当たるまでは何回も打てること」という意見が多く出た。

3. 野球を学ぶ

続いて野球について取り組んできた。こちらもクリケットと同様に一般的なルールは用いず、特性だけを残したルールを簡易化したゲームを行った。野球に関しても、子どもたちが学習を積み重ねながら、ルールを変遷していった。野球では、クリケットに比べて少しゲームの難易度が高いため。用具についても様々な選択肢を用意して、苦手な子どもでも楽しめるように工夫していった。

こちらも同様に、学習していく中で、チームで勝つためにどのようなことがポイントになるのかを確認していった。攻撃については「守備がいらないところをねらって打つこと」「遠くへ打つこと」「相手やボールを見てすばやく走ること」が、守備については、「打者に応じて守備の隊形を考えること」「捕ったら状況判断をしてすぐに送球すること」「ボールを持っていない守備は中継したりベースカバーしたりすること」が、子どもたちが考えたポイントだった。

野球についても同様に、技能が向上していった。さらに子どもたちにとって、ベースがあったり、打つ方向が一定であったりすることからクリケットよりも技能を向上する必要性を感じているようだった。

野球についても学習の終わりのまとめとふり返しとして、今回学んだクリケットの良さやオリジナルベースボ

ールづくりに生かしたいことを考えさせた。子どもたちからは「ランナーがベースにいて攻撃も守備も面白くなること」という意見が多く出た。

4. オリジナルベースボールづくり

2つのベースボールの学習を生かして、オリジナルベースボールを考えた。最初に確認したのは単元の最初に提示した学習課題である。「全校児童生徒が楽しめること」「それぞれのベースボールを学んだことを生かすこと」という2つのポイントについては、オリジナルベースボールを考えるにあたって、はずれないようにしたい視点として確認した。

次に、それぞれの良さや生かしたい点を交流した。上記のそれぞれのよさが意見として出たが、それらを生かすことについては難しさを感じているようだった。どちらも生かすということは難しく、どちらかのベースボールをベースとして考えて取捨選択しなくてはいけないという話し合いになった。多くの子どもたちはクリケットよりも野球の面白さを生かしたいという意見だった。特に面白さを感じていたのは、ベースがあることで攻撃においては打球や守備の状況に応じてどこまで進塁するのか、守備においてはどこでアウトをとるのかを判断することだった。これを生かし、打球がフェアになる範囲やアウトの取り方は基本的には野球のルールを採用した。一方で全校児童生徒が楽しむという観点においては、低学年児童にとって難しすぎるという意見も出た。そこで、クリケットのベース間を走る毎に得点が加算されていくルールを採用し、低学年が打者の場合は進塁した分だけ得点が入るというルールにした。さらにホームベースにはクリケットのウィケットを置き、ピッチャーが投げたボールがウィケットに当たった場合はアウトというルールも付け加えた。(ルールの詳細については別紙参照)この話し合いの様子から、それぞれの文化を比較したことで、それぞれの良さや醍醐味について理解することができたと示唆される。また、考えたオリジナルベースボールにおいては、ベースボール型に備わっている特性は失うことなくルールを考えたとことから、技能を向上させていくという体育科としてのねらいも達成していける教材にもなっていた。この時点で子どもたちは自分たちが考えたオリジナルベースボールに「ヤケット」と名付けた。

この話し合いの後に自分たちの考えた「ヤケット」が十分みんなが楽しめるものかどうか吟味していった。多少の見直しがあったものの「ヤケット」をやってみて、子どもたちは手応えを感じている様子だった。学んできたことから新たな価値を生み出し、さらにその価値が十分に高いということで達成感があったようだった。また、価値が高く感じた理由としては子どもたちの技能が向上したこともあると考えられる。高いレベルでゲームができることで、面白さが増したように見受けられた。

本校では委員会活動の1つに学期末に全校児童生徒でレクリエーションを行う集会がある。本年度の3学期末の集会において、今回考えた「ヤケット」をしたいという提案が子どもたちから出た。それを受けて委員会担当の子どもたちが「ヤケット」を低学年児童も一緒にできるように企画した。また、当日うまくいかどうかを高学年の子どもたちが休み時間を利用して自主的に「ヤケット」に取り組む姿が見られた。誰もが楽しめるように心を砕くことができるという力はとても大切である。実際に子どもたちは、苦手な人ややったことがない人でも楽しめるためにはどうすればいいのかと考えていた。飛躍した論になってしまうが、今回国際理解教育という観点からも異なる文化を比較し、融合していく学習に取り組んできたことで、みんなで楽しさを共有しようとする姿勢が見られたことから、これからの子どもたちに求められる国際感覚として身についたのではないかと考えられる。

最後のまとめとして、学期末の集会で「ヤケット」に取り組もうとしたが、子どもたちは考え抜いた末、自分たちが考えたものとは大幅にルールを変えたものを行った。他の教員からの助言もあり、低学年用のルールを用意していたものの難しすぎると判断したからである。過去の集会で行ったことのあるキックベースのルールをもとに別のゲームを行った。それでも当日はゲームの進行がうまくいかないという結果に終わった。しかし、子

もたちはそれでも満足感があったようだった。ふり返りにもあったが、子どもたちなりに一生懸命考えたことをみんなが取り組んでくれたことはうれしかったようだった。また、今回のことを反省として捉えて、これからこういったゲームをつくっていくためには、シンプルで用意に時間がかからないことも意識する必要があると考えた児童もいた。

8. 今後の展開・取り組むべき課題

今回の実践は授業者として手応えを感じている。国際理解を深めていくことで、視野が広がり、教科のねらいについても包括できるという考察ができた。さらに、前年度にカレーを教材として扱った実践を行ったが、この学習過程については汎用性が高いと考えられる。来年度にはまた違った教材を取り上げながら、今回の実践をもとに、よりブラッシュアップした実践を展開できるように教材研究を深めていきたい。そして、ここで培った経験を日本に帰っても生かせるようにしていきたい。

7. まとめ

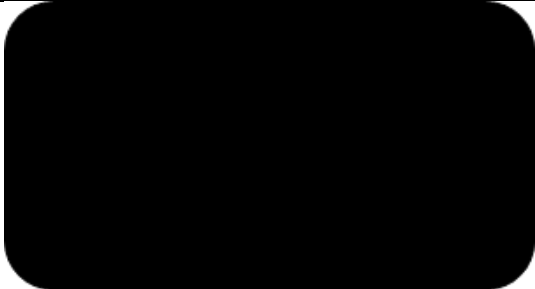
本実践では、国際理解教育という視点から総合的な学習の時間と体育科の合科的な単元を展開した。また、その学習過程としてはそれぞれの国の文化を比較し、融合していくという課題に取り組んでいった。これらの学習によって、子どもたちはそれぞれの文化、今回であればクリケットと野球のよさが明確になるとともに体育科ならではの見方や考え方をもって、技能を向上させることができた。つまり、新学習指導要領で求められているような総合的な学習の時間で身に付けたい資質・能力と教科で身に付ける資質・能力には密接な関連があることが考えられた。さらに、両文化を理解するところにとどまるのではなく、新たな価値を見出すために課題を見つけ解決していく力も身についた。文化の融合を目指すという課題設定によって、子どもたちの解決に向けての目的は自他共の喜びや幸せへとベクトルが向くということを実感したことも大きな成果である。

※記入欄は適宜拡張してください。

申請日: 2019年 3月 12日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
グローバル教師事務局 様

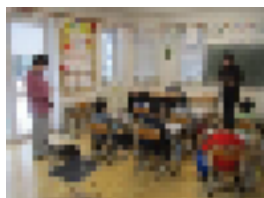
2018 年度「教育実践研究」支援プロジェクト 報告書

1. 研究代表者	
(1)氏名(ふりがな)・役職・所属校での年次	金本 真一 (かねもと しんいち) ・教諭・ 3年目
(2)所属校	在ポーランド日本大使館付属ワルシャワ日本人学校
(3)e-mail アドレス	
2. 共同研究者氏名(役職・派遣教師か否か・所属校での年次も併記してください)	
	
3. 研究課題名	
社会科・総合的な学習の時間・国際理解教育等に役立つ副読本の作成と活用	
4. 申請時の状況と課題	
本校は平成 30 年度に 40 周年を迎え、副読本「チェシチポルスコ」を作成した。これは、10 年ごとに改定を重ねポーランドの文化や地理などをまとめたものである。今までこの副読本を活用しながら、社会や総合的な学習を展開していたが、今回改定にあたり現地校との交流などにも活用できたらと考えた。改定を機に、これまで以上の有効な活用、また多様な活用方法を学んでいくことが必要であった。	
5. (支援を受ける)目的・ねらい	
本校は小規模校であり、現在中学部も含め 18 名しかいない(平成 31 年度 2 月時)ため、多様な学習を展開することが難しい。学年によっては一人しかいない学年もあり、話し合いなどが多様に展開していかない。えてして、教師主導の学習になってしまうことが多い。今回、支援を受け、様々な学習方法を学ぶことにより、今までになかった学習展開を考えていくことがねらいとなる。	
6. 取組内容(※指導を受けた内容も記載のこと)	
1) 現地校9STO校との交流活動に生きるチェシチポルスコの活用 現地校9STO校とは、年間 4 回、過去 10 年にわたり交流活動を続けている。うち 2 回は本校に招き日本文化などを紹介し、2 回は現地校に赴きポーランドの遊びや文化を学んでいる。その際に、チェシチポルスコを活用し、交流の一助にしたい。 2) 新学習指導要領について 外地にいと、なかなか最前線の情報を手に入れることは難しい。今回、指導要領の改訂にあたり、支援に	

来てくださる先生に事前に知りたい事項についてお話しし、情報を集めてもらった。来校の折に、全教員にて「情報交換会」を行い、次年度に向けての必要な情報を得ることができた。

3) 専門性に合わせた授業研究

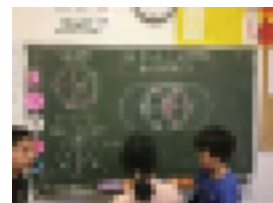
今回来てくださる講師の先生が、「生活科」「社会科」の専門とのことだった。それに合わせ、本校職員が授業を行い、指導・助言をいただいた。人数の少ない小規模校である本校では、授業研修があまりできない。こうした外部からの声を聴き、日常実践に生かすことは大変有意義であるとする。



1, 2年 生活科



3, 4年 総合的な学習の時間



5, 6年 算数科

4) 学校の教育課程に生きる「チェシチポルスコ」の活用

生活科・総合的な学習の時間を使い、1年を通してチェシチポルスコを活用しながら探究学習を展開していく学習方法を学んだ。また、社会科の学習の中で「いつ」「どこで」「どの場面で」活用できるか、次年度以降意識しながら学習を行い、記録することで本校独自のカリキュラムマネジメントに生かす。

7. 成果・効果等 (※詳細に記載し、成果物があれば添付のこと)

1) 現地校9STO校との交流活動に生きるチェシチポルスコの活用について

チェシチポルスコの中には、ポーランド文化に触れている箇所がある。今回は2月の「脂の木曜日」にちなみ、それにまつわる劇を現地校にしてもらおうことになった。計画段階において、チェシチポルスコを事前に見せ、その内容に合わせた交流をしてもらえるように打診したからである。今までは、交流内容は相手に任せてしまい、積み上げが図れていなかった。今回を機に、次年度以降の交流の際にもチェシチポルスコをベースに交流内容を検討していくこととなった。時間の都合で劇は次年度実施となったが、お互いに文化のどのことを知りたいのか、理解しあいながら交流を図る第一歩となった。

また、継続した交流活動を展開していくにあたり、児童生徒のモチベーションのためにも毎回の活動の後、振り返りを確実にすることとした ※別紙資料参照

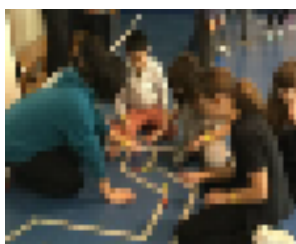
相手のあることだからと、なかなか積みあがっていかなかった活動を継続的なものすることができた。講師の先生の訪問のおかげであり、ワルシャワ日本人学校全体にとって大きな意味のあるものとなった。



事前学習の様子



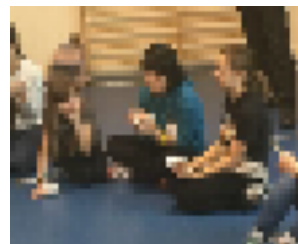
チェシチポルスコと相手校の用意してくれた資料を見比べる児童



現地の遊びを教えてもらう



日本にはない遊びがあった ポンチュキを食べながら会話をする生徒



4) 学校の教育課程に生きる「チェシチポルスコ」の活用について

今回のチェシチポルスコを訪問していただいた講師の先生とともにもう一度見直すことで、この副読本が社会の学習に密接に関わっていることを改めて学ぶことができた。また、後半のポーランドの文化についての紹介は生活科や総合的な学習の時間に活かせる情報量を確保していることも見えた。

今まで各教科担任(ワルシャワ日本人学校は教科担任制をとっている)に任されていた活用方法を、「積極的に活用するもの」と位置づけ、それを活かした取り組みについては記録していく。そうして毎年蓄積された情報を参考に、より効果的な活用ができるものと考えた。50周年の際に副読本であるチェシチポルスコが改定されるのであれば、そうした情報を基に、より学びに生かしやすいものにしていくことも可能であろう。

また、並行して各担任に任されていた総合的な学習の時間(低学年は生活科も活用して)にて、チェシチポルスコをベースに調べ学習に取り組んでいくことも提案した。毎年帰任する教員と着任する教員が入れ替わる在外教育施設に於いて、基本的な学習計画が定まっていないのは大きな負担である。そうしたジレンマを解消するべく、チェシチポルスコをベースに1年間の学習活動を展開できるような形を考えていくこととなった。

そして、学習発表会や各種交流会にもその学びを関連付けることができるような計画にしたい。そうした効率化を図ることで、各担任はもちろん子供たちの負担感も減らすことができるだろう。

※別紙資料参照

8. 今後の展開・取り組むべき課題

今回、単年度の計画としてではなく、年度をまたいでの継続的な取り組みとして大きく2つの提案をすることができた。私自身は帰任するので、この提案が実施されるのか、また今後どのような取り組みになっていくかを確認することはできないが、人の入れ替わる在外教育施設の中で、基本的な「型」というものは必要であると考ええる。

まず1つ目の現地校との交流については、今後継続的な取り組みが望まれる。年度が替わり、担当者および児童生徒が変更となっても、一年ごとの積み重ねがあれば、より効果的な取り組みをすることができるだろう。また、積み重ねが蓄積されるごとに交流もブラッシュアップされ、より良いものになっていくはずである。

2つ目のチェシチポルスコを教育課程に生かす取り組みも同様である。毎年の積み重ねが、より良い活動につながっていくので、今後とも途切れさせることなく継続させていきたい。

今回の提案を皮切りに、本校で取り組まれている教育活動の中で見直す部分はどこか考えるきっかけとなった。また、継続的な取り組みをしていく実践をしていくことが、今後の課題であることが浮き彫りとなった。

7. まとめ

在外教育施設は人の入れ替わりが激しく、1年目の派遣教員は自分の生活を安定させるために必死になっ

てしまう。3 年目の人間は帰任してしまうので、大きな変化を伴う提案をすることは気が引けてしまう。そうしたジレンマを持つ在外教育施設において、年度をまたいでの継続的な取り組みをすることは必要であると思う。

今回の講師の先生のご指導で、私も含めて継続的な取り組みをするという意識を持てたことは、ワルシャワ日本人学校にとって大きな意義があったことと感じる。

また、このような機会をいただき、子供たちに還元できる実践を行えたのも、財団のトビ立てプロジェクトのおかげである。今後も様々な形で当プロジェクトを活用し、広めていくことを意識していきたい。私の拙い実践も、世界各地の実践の一助になれば幸いである。

※記入欄は適宜拡張してください。